令和6年度文化庁合同特別展示「発掘された日本列島2024」地域展

大多喜 台古墳群の鏡がうつし出す時代

令和6年度文化庁合同特別展示
「発掘された日本列島2024」
地域展
大多喜 台古墳群の鏡がうつし出す時代

発行日：令和6年6月8日
編集・発行：千葉県立中央博物館
千葉県千葉市中央区青葉町955−2
043（265）3111
印刷：株式会社 正文社

千葉県立中央博物館
NATURAL HISTORY MUSEUM AND INSTITUTE, CHIBA

ごあいさつ

千葉県立中央博物館では令和3年度に、夷隅郡大多喜町の台古墳群から出土した鏡（千葉県指定有形文化財「半円方格帯神獣鏡」）の寄贈をうけました。この鏡は昭和13年頃に発掘され、極めて良好な保存状態や、その歴史的な重要性から、考古学の世界では早くから存在が知られていました。

当館では、発掘されてから80年以上が経った現在も輝きを放つこの鏡を受贈後初公開するとともに、この鏡がどのような歴史を物語るのか、県内の遺跡から発掘された出土品とあわせてさぐる展示を企画いたしました。

本展示が、台古墳群の鏡の存在や重要性について知っていただくきっかけとなり、また千葉県にはたくさんの貴重な遺跡があること、これからも新たな発見が期待されることを皆様に知っていただく機会となれば幸いです。

最後に、長きにわたってこの鏡を大切に守ってこられ、この度当館へ託してくださった寄贈者様、そして本展示の開催にあたり御支援を賜りました皆様に、深く御礼申し上げます。

令和6年6月
千葉県立中央博物館
館長　稲村　弥

凡例
1 本冊子は、令和6年度文化庁合同特別展示「発掘された日本列島 2024」（令和6年6月8日（土）～7月15日（月・祝）開催）における地域展「大多喜 台古墳群の鏡がうつし出す時代」の解説用に作成したものです。
2 本冊子および展示の主要資料である鏡が出土した遺跡の名称は「台古墳群」ですが、県内外の同名遺跡との区別のため、本冊子および展示タイトル等では便宜的に「大多喜 台古墳群」という名称を用いています。
3 本冊子掲載画像のうち、資料所蔵機関から提供をうけた画像についてはキャプション中に記載しています。その他、断りのないものは千葉県立中央博物館が撮影しました。
4 本冊子で用いる資料名称は、資料所蔵機関あるいは所有者が用いる名称とは異なる場合があります。
5 本冊子の資料の掲載順は、実際の展示順とは一致しない場合があります。また、展示をしていても本冊子に掲載していない資料、あるいは本冊子に掲載していても展示をしていない資料があります。
6 本冊子で対象とする鏡は、すべて青銅製の鏡（銅鏡）を指します。
7 本冊子は千葉県立中央博物館の石井友菜が構成・執筆・編集を担当し、同館の須田 華那、小出 麻友美、丸山 啓志、御巫 由紀、鈴木 建人、米谷 博、幅 大、小川 宏和、渡瀬 綾乃、榎 美香の補助を得て作成しました。
8 本ページ以降は、年代を和暦（西暦）で記載します。

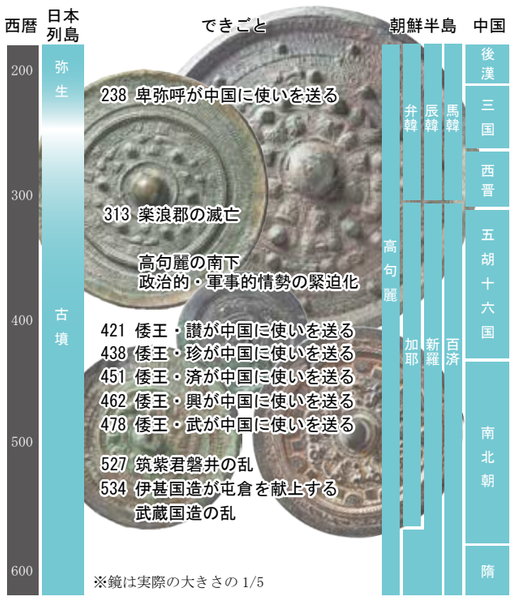
古墳時代の鏡と房総

古墳時代の鏡は、主に古墳の副葬品として出土しますが、集落や祭祀遺跡からもみつかることがあります。現在確認されている古墳時代の鏡の数は、6千数百面※にのぼるといわれています。鏡は、当時の王権（倭王権）から各地の有力者へ配られたものと考えられており、単なる姿見として以上に、権力の象徴としての意味合いをもっていました。このことから、当時の社会を考えるうえでたいへん重要な資料として扱われています。

房総ではこれまでに100面以上の鏡がみつかっています※。鏡が出土した遺跡の位置と、主要な鏡の写真を「房総出土鏡マップ」に示しました。このマップをみると、東京湾沿岸での出土が多いことがわかります。当地域は古墳時代を通じて大きな前方後円墳がつくられ続けた地域でもあり、鏡の出土量は当地域にいた勢力の力の大きさを反映していると考えられます。一方、大多喜町周辺では出土は少なく、この点でも台古墳群の鏡は貴重な資料といえます。

※（下垣2016,p.530,p.32-42）の数を参照して記載。

本冊子が対象とする時代のできごと



房総出土鏡マップ

※鏡のサイズは実物の1/5

台古墳群の鏡とは

台古墳群は、夷隅郡大多喜町下大多喜に所在する、前方後円墳1基、円墳11基からなる古墳群です。この古墳群の円墳から昭和13（1938）年頃に発掘されたのが、今回寄贈いただいた鏡です。

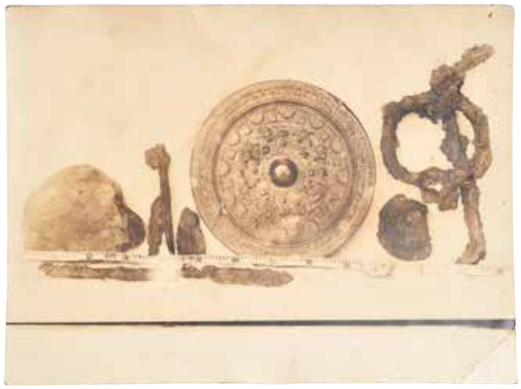
昭和27（1952）年春、千葉県立大多喜高等学校が郷土の歴史探究のために古墳群の調査を計画し、早稲田大学の滝口宏教授らを招いて発掘をおこないました。この発掘報告の際に、かつて古墳群でみつかった資料として紹介されたことで、鏡の存在が広く知られるようになりました。その後、昭和30（1955）年に千葉県指定有形文化財に指定されています。

鏡が出土した円墳の大きさは径約25mとされていますが※1、測量などの調査はおこなわれておらず、正確な大きさはわかっていません。また、勾玉や馬具、鉄鏃なども出土したとされていますが、その詳細はわかっていませんでした。しかし、この度寄贈いただいた品の中に1枚の紙焼き写真があり、鏡のほかに同じ古墳から出土したと思われるいくつかの遺物が写っています。写真の遺物の検討からは、鏡が出土した古墳は6世紀につくられたものと考えられます※2。

鏡背面

鏡面

千葉県指定有形文化財
大多喜町台古墳群 画文帯環状乳神獣鏡
（指定名「半円方格帯神獣鏡」）
径：約15.5㎝
千葉県立中央博物館蔵



台古墳群の鏡が写る紙焼き写真
幅：15.8㎝
千葉県立中央博物館蔵

※1（白井2002,p.347）
※2 鏡とともに出土した遺物については紙焼き写真と過去の文献の記述などの間で一致しない点もあり、遺物の詳細や古墳の年代については今後のさらなる調査が必要です。

台古墳群の鏡に描かれた世界

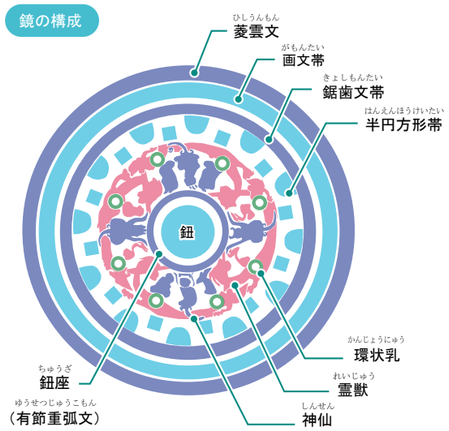
台古墳群の鏡の背面には、中国の神仙思想が表現されています。中央部には主題となる文様の神仙や霊獣が描かれ、獣の腰や肩は環状の突起（環状乳）となっています。また、半円方形帯をはさんだ外側には日月や飛龍などを描いた文様帯（画文帯）がめぐり、こうした特徴から「画文帯環状乳神獣鏡」とよばれています。

四方に4体の神仙が配されており、向かって右は西王母、左は東王父、上は琴の名手である伯牙、下は黄帝と考えられています。この図像は、西王母と東王父がもつ陰と陽のエネルギーを、伯牙が奏でる音楽で調和し、世界が安定するさまを表現していると考えられています※。また、神仙の間に配置されている霊獣は、天地をつなぐ維綱をくわえています。

方形は4つに区切られ、その中に1文字ずつ小さな字が記されています。ここには、鏡の効能や文様の意味などが書かれています。

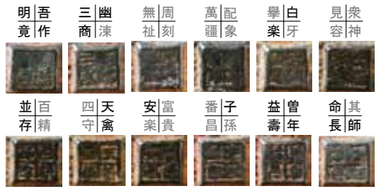
※文様、銘文の解釈は（車崎2003,p.82）を参照して記載。

鏡の構成



神仙

銘文 ※伯牙像の上から向かって右に進む



※黒色は（樋口 1981, p. 4）の判読。灰色は（車崎 2003, p. 81）の判読および他の鏡の銘文からの推定。

（車崎 2003, p. 83）による釈文

吾の作りし明き鏡は、三商（銅・錫・鉛または銀の三種の金属）を幽く凍りて、彫刻することは止まること無く、像を配するところは萬疆（限りない）にして、伯牙は楽を擧げて、衆くの神は容を見わし、百の精は並び存まして、天禽なる四獣は［維綱を銜え持ち］、富かにして貴く安らかに楽しみ、子孫は蕃え昌んになり、年を増して益ます壽ながく、これをつくりし其の師の命長きがことくならん

複雑な文様や銘文が表現されている一方、神仙の顔が細部まで鋳出されていなかったり、銘文が読めないほどに潰れていたりと、粗雑なつくりであることもこの鏡の重要な特徴です。3～4世紀の古墳から出土した鋳上がりのよい画文帯環状乳神獣鏡と比べると、その差が明瞭です。

これには、台古墳群の鏡が生み出されるに至った、歴史的な背景が関係していると考えられています。

重要文化財
大阪府和泉黄金塚古墳
画文帯環状乳神獣鏡
部分拡大写真
東京国立博物館蔵、
画像提供：Colbase（https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-36931?locale=ja）を加工
台古墳群の鏡と異なり、神仙や銘文が明瞭に鋳出されている。

同じ文様をもつ5面の鏡 ―同型鏡―

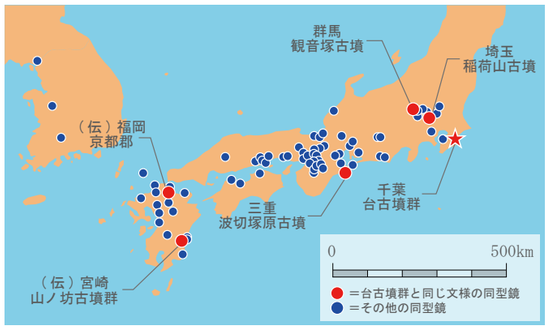
日本各地から、台古墳群の鏡とぴったり同じ文様の鏡が5面みつかっています。これらは、踏み返し※1とよばれる技術によって同じ原型からコピーされたために同じ文様をもっています。後漢（25～220）など古い時代の鏡をもとに中国南朝宋（420～479）の時代に踏み返してつくられたものと考えられ、踏み返しを繰り返して大量生産したために、文様が不鮮明で粗雑なつくりになっています。こうした鏡は台古墳群の鏡をふくめ、東アジアで約30種約140面※2存在するとされていますが、そのほとんどが日本列島の、5世紀後半～6世紀の古墳から出土しています。こうした鏡を、考古学では同型鏡とよんでいます。

これらは、5世紀に存在したとされる5人の大王（讃・珍・済・興・武）、いわゆる倭の五王が中国南朝宋へ遣使をおこなった際に入手し、日本列島にもたらされた後、各地へ配られた鏡であるという説が提唱されています。

倭の五王の遣使は中国の歴史書には登場しますが、日本の歴史書にはほとんど情報がありません。同型鏡は、東アジアの国際交流の歴史を知るうえで貴重な手がかりとなっています。

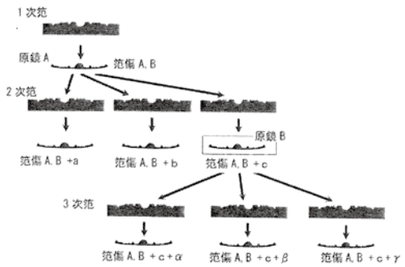
国宝
埼玉県埼玉稲荷山古墳
画文帯環状乳神獣鏡
径：約15.5㎝
文化庁蔵、埼玉県立さきたま史跡の博物館保管

重要文化財
群馬県八幡観音塚古墳
画文帯環状乳神獣鏡
径：約15.5㎝
高崎市立観音塚考古資料館蔵
※写真にはテグスが写りこんでいる。



同型鏡の出土遺跡の分布
（台古墳群の鏡と同じ文様は赤、それ以外の同型鏡は青で図示。このほか、北京・故宮博物院に中国出土と伝わる鏡の所蔵がある）

※1 鏡を真土に押し付けて新たに鋳型をつくり、同じ文様の鏡を複製する技術。
※2 鏡の数は（辻田2019,p.279）に基づく。



鏡の踏み返しのイメージ図（水野2012,p.28図11）

志摩市指定文化財
三重県波切塚原古墳
画文帯環状乳神獣鏡
径：約15.5㎝
志摩市歴史民俗資料館蔵

重要美術品
伝福岡県京都郡
画文帯環状乳神獣鏡
径：約15.5㎝
藤井有鄰館蔵

重要美術品
伝宮崎県新田原山ノ坊古墳群
画文帯環状乳神獣鏡
径：約15.3㎝
国立歴史民俗博物館蔵

ぴったり同じ、だけどすこし違う鏡

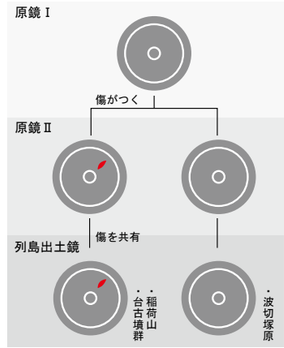
台古墳群の鏡と5面の鏡の文様はぴったり同じですが、よく見ると非常にわずかな違いがいくつかあります。その一つが、踏み返しの際についた鋳型（笵）の傷です。たとえば台古墳群と埼玉稲荷山古墳の鏡には同じ傷がありますが、波切塚原古墳の鏡にはありません。これは踏み返しによって複製を繰り返していく過程で、違う鏡から鋳型がつくられたためと考えられます。

鏡を詳細に見比べることでわかるこのような特徴は、同型鏡の生産のあり方を考える貴重な手がかりとなります。台古墳群の鏡が、錆がほとんど発生していない極めて良好な状態を保っていることは、こうした研究の上でも重要な意味をもっています。

台古墳群の鏡

埼玉稲荷山古墳の鏡

波切塚原古墳の鏡



傷のつき方から想定される鏡の生産過程

同型鏡を手に入れた人物

房総では台古墳群のほかに、木更津市の鶴巻塚古墳と祇園大塚山古墳から、違う文様の同型鏡がみつかっています。とくに祇園大塚山古墳の鏡は径30.4cmと非常に大型で、5～6世紀の銅鏡としては東アジアのなかでも最大級です。このような鏡を手にした人物とは何者だったのでしょうか。

その手がかりとなるのが、鏡とともに出土したとされる金銅製の甲冑です。他には日本最大の前方後円墳である大阪府大仙陵古墳でしか確認されていない、たいへん貴重なもので、王権に高く信任された人物に特別に授けられた品と考えられます。このような品を入手できる人物が、同型鏡を手に入れたことがわかります。

重要文化財
木更津市鶴巻塚古墳
画文帯仏獣鏡
径：22.0㎝
五島美術館蔵、画像提供 <撮影：名鏡勝朗>
北京・故宮博物院所蔵の鏡と同じ文様をもつ。

木更津市祇園大塚山古墳
画文帯仏獣鏡
径：30.4㎝
宮内庁書陵部蔵、画像提供

木更津市祇園大塚山古墳
金銅製眉庇付冑
東京国立博物館蔵、画像提供：Colbase（https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-728?locale=ja）

木更津市祇園大塚山古墳
金銅製小札甲
東京国立博物館蔵、画像提供：Colbase（https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-735?locale=ja）

倭の五王の時代と房総

倭の五王の時代は、朝鮮半島において高句麗が南部の国々に侵攻し、東アジアの国際情勢が緊迫化した時代でもありました。倭の五王が遣使をおこなったのは、中国王朝から将軍号の除正をうけ、朝鮮半島の勢力よりも優位な立場に立つためだったと考えられています。

また、高句麗の南下をうけて半島南部の百済や加耶地域が日本列島へ支援を求めた結果、相互の交流が盛んになり、半島由来の様々な文物や文化が日本列島へもたらされました。房総でも市原市姉崎二子塚古墳（前方後円墳、114m）で銀製の耳飾り、富津市内裏塚古墳（前方後円墳、145m）で胡籙金具など、朝鮮半島由来の副葬品がみつかっています。

さらにこの時代は、埼玉県埼玉稲荷山古墳の鉄剣、熊本県江田船山古墳の大刀のように「王」の名を刻んだ刀剣がみつかっています。房総でも、5世紀中頃の市原市稲荷台1号墳（円墳、27.5m）から日本列島でつくられた有銘刀剣の中でも最古とされる「王賜」銘鉄剣がみつかっており、倭の五王のいずれかから授けられたものと考えられます。

このように、房総には倭の五王の時代を考える上で重要な資料が多く発見されています。

市原市姉崎二子塚古墳
銀製垂飾付耳飾り
國學院大學博物館蔵

市原市指定文化財
市原市稲荷台1号墳
銀象嵌「王賜」銘鉄剣
市原歴史博物館蔵、画像提供

新たな文化の流入

倭の五王の時代に新たに到来した文化として、須恵器の生産、乗馬の風習などが挙げられます。

市原市草刈六之台遺跡では、大阪府・陶邑窯跡でつくられた須恵器や、須恵器の技法で作られた土器（赤焼き須恵器）がみつかっており、新たなやきものの技術がいちはやく房総に到来したことを物語っています。

市原市草刈六之台遺跡
須恵器・赤焼き須恵器
千葉県教育委員会蔵、画像提供

乗馬の風習は、朝鮮半島との軍事的な交流の中で日本列島に導入されました。各地の古墳から、馬を操るための道具である馬具（轡や鐙など）が出土するようになり、台古墳群でも鏡とともに馬具がみつかっています。房総の遺跡のうち、馬の存在を最も明確に物語るのが佐倉市大作31号墳（円墳、15m）で、馬具を装着したままの馬を埋葬した土壙が発見されています。

佐倉市大作31号墳　第1号土壙・馬具・馬の歯
千葉県教育委員会蔵、画像提供
馬具には馬の歯が付着している。

鏡をもつ人々　5～6世紀の鏡と房総の古墳

古墳時代を通じて鏡が最も多く用いられたのは3～4世紀で、教科書でもおなじみの三角縁神獣鏡も主にこの時期の古墳から出土します。その後、5世紀前半には鏡の使用は一旦低調化しますが、5世紀後半になると同型鏡の出現を契機に、日本列島独自のデザインの鏡も生み出されるなど、再び鏡の生産や使用が活発化します。房総でも、さまざまな大きさや文様の鏡がみつかっています。

市原市牛久石奈坂1号墳

5世紀後半につくられた径29.8mの円墳で、鉄製農工具、玉類、武器などとともに大型の鏡が見つかっています。

市原市牛久石奈坂1号墳出土品
市原歴史博物館蔵、画像提供

市原市指定文化財
市原市牛久石奈坂1号墳
鼉龍鏡
径：16.8㎝
市原歴史博物館蔵

市原市持塚1号墳

5世紀末頃につくられた径約40mの円墳で、埋葬施設から大刀や刀子、鉄鏃、砥石、玉類などとともに鏡が出土しています。

旋回式神獣鏡の文様は、画文帯環状乳神獣鏡などの中国由来の文様の影響をうけて日本列島で生み出されたと考えられています。

市原市持塚1号墳
旋回式神獣鏡
径：13.3㎝
千葉県立房総のむら蔵

我孫子市金塚古墳

5世紀末頃につくられた径20mほどの円墳で、石枕・立花、鉄鉾、鉄鏃、短甲とともに小型の鏡が出土しています。石枕・立花は5世紀代の房総に特徴的な遺物で、在地的な要素と、鏡や短甲などの王権からもたらされた要素が共存している古墳です。

石枕・立花
我孫子市教育委員会蔵、画像提供

短甲
我孫子市教育委員会蔵、画像提供

千葉県指定文化財
我孫子市金塚古墳
捩文鏡
径：8.1㎝
我孫子市教育委員会蔵

木更津市金鈴塚古墳

6世紀末頃につくられた墳丘長95mの前方後円墳で、純金製の鈴や、日本で最も多くの飾り大刀が出土したことで有名です。

横穴式石室の後方左壁付近から乳脚文鏡が、石室前方の石棺内から旋回式神獣鏡が出土しています。

重要文化財
木更津市金鈴塚古墳
乳脚文鏡・旋回式神獣鏡
径：10.8㎝、15.8㎝
木更津市郷土博物館金のすず蔵、画像提供

富津市三条塚古墳

6世紀末頃につくられた墳丘長122mの前方後円墳で、この時期の古墳としては東日本最大級です。横穴式石室から馬具や耳環とともに鏡が出土しています。石室の一部は未発掘で、未だ多くの副葬品が残っている可能性があります。

富津市三条塚古墳
出土遺物と横穴式石室
富津市教育委員会蔵、画像提供

富津市三条塚古墳
乳脚文鏡
径：10.0㎝
富津市教育委員会蔵

鴨川市嶺岡遺跡

8世紀の土師器や三彩、銅鋺などとともに鈴のついた鏡（鈴鏡）が出土しました。鈴鏡は5～6世紀に流行した日本列島独自の鏡です。

鴨川市嶺岡遺跡
七鈴鏡
径：11.8㎝
国立歴史民俗博物館蔵
鈴のなかには小石が入っている。

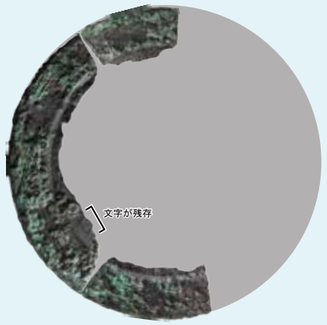
成田市瓢塚16・17号墳

瓢塚16号墳は一辺14mの方墳、17号墳は径25mの円墳で、どちらも日本列島でつくられた小型の鏡が出土しています。成田市周辺では、4～5世紀初頭の古墳からは大型の鏡が見つかっていますが、5世紀後半～6世紀の古墳からは小型の鏡しか見つかっていません。

成田市（左）瓢塚16号墳　獣文鏡、（右）瓢塚17号墳　乳脚文鏡
径：（左）7.5㎝、（右）8.0㎝
千葉県立房総のむら蔵

香取市禅昌寺山古墳

墳丘長60～70mの前方後円墳で、馬具や鉄鉾、小札甲、石枕などとともに鏡の破片が出土しています。破片のため描かれた文様などは分かりませんが、縁の部分から復原した径によると、房総出土の古墳時代の鏡としては5番目の大きさです。



香取市禅昌寺山古墳　銅鏡片
復原径：約20.2㎝
千葉県立房総のむら蔵

文字部分の拡大写真

香取市城山1号墳

墳丘長68mの前方後円墳です。横穴式石室のなかから、京都府椿井大塚山古墳と同じ文様の三角縁神獣鏡が出土しています。三角縁神獣鏡は通常、古墳時代のなかでも3～4世紀と早い時期の古墳から出土しますが、城山1号墳は6世紀後半の古墳であり、全国的にみても特殊な出土事例です。鏡とともに飾り大刀が5本出土しており、この本数は県内では金鈴塚古墳に次いで多く、被葬者の力の大きさをあらわしています。

千葉県指定文化財
香取市城山1号墳
三角縁神獣鏡
径：22.2㎝
香取市教育委員会蔵

飾り大刀<環頭部分拡大写真>

台古墳群に眠る人物は何者か

房総の古墳からはさまざまな鏡が出土していますが、同型鏡の出土例は数少なく、こうした鏡を入手できたのは極めて限られた存在であったと言えます。

それでは、貴重な鏡を手にした人物、台古墳群に眠る主とはどのような存在だったのでしょうか。台古墳群が所在する地域の歴史的環境から考えてみます。

一宮川流域では、長南町油殿1号墳（前方後円墳、93m）、能満寺古墳（前方後円墳、73.5m）など、4～5世紀初頭にかけて大きな古墳がつくられますが、その後は大型の古墳は築造されていません。しかし、5世紀後半になると、睦沢町浅間山1号墳（円墳、27m）など小規模な古墳に、胡籙金具、三輪玉など最新の文物とともに小型の鏡が納められています。

この時期、養老川の中・上流域でも大型の鏡をもつ牛久石奈坂1号墳、金銅装馬具をもつ江子田金環塚古墳（前方後円墳、45m）、新式の鉄鏃や須恵器をもつ山小川1号墳（円墳、15m）などが確認されており、当地域が5世紀後半～6世紀前半、ちょうど同型鏡が日本列島に出現し、各地へ展開するのと同時期に隆盛したことがわかっています。

長南町能満寺古墳　銅鏡片
復原径：8.6㎝
明治大学博物館蔵、画像提供

睦沢町浅間山1号墳
盤龍鏡
径：7.4㎝
千葉県立房総のむら蔵

千葉県指定有形文化財
市原市江子田金環塚古墳
金銅装馬具
市原歴史博物館蔵、画像提供

※△は古記録等で遺物が出土したとされるが詳細不明の古墳を示す。

台古墳群周辺の歴史的環境
（河川は養老川、一宮川、夷隅川のみを抜粋して表示。国土地理院地理院タイル陰影起伏図、基盤地図情報5mメッシュを使用しQGISで加工して作成。）

一方、台古墳群が所在する夷隅川流域は、古墳時代を通じて大きな前方後円墳がつくられなかった地域です。しかし6世紀に入ると、王権から授けられたと考えられる貴重な金銅装馬具をもつ大多喜町横山1号墳や、人物埴輪をもついすみ市三門（豆塚）古墳などがつくられます。また古い記録をたどると、馬具や鏡が出土したとされる遺跡がほかにもいくつか確認されており、夷隅川流域は6世紀に隆盛をむかえることがわかります。

大多喜町横山1号墳
金銅装馬具
（f字形鏡板付轡、剣菱形杏葉）
剣菱形杏葉の長さ：18㎝
早稲田大学會津八一記念博物館蔵

また、この地域の歴史を考える上で興味深いのが、『日本書紀』安閑天皇元年（534）の条にある、伊甚国造稚子直の失態と屯倉の献上についての記述です。伊甚は現在の夷隅地域で、そこに屯倉、すなわち天皇が直接支配をおこなう直轄地がおかれたことがわかります。この頃、九州では筑紫君磐井の乱、関東では武蔵国造の乱と、地方豪族の大規模な反乱およびその制圧、そして屯倉の設置がおこなわれ、王権による地方の支配が急速に進んでいったと考えられています。

〈現代語訳〉
夏四月の癸丑の朔に、内膳卿 膳臣大麻呂は、勅命をうけて使を遣わし、伊甚に珠を求めさせた。伊甚国造らはなかなか都へ来ず、定められた時までにたてまつらなかった。膳臣大麻呂は大いに怒り、国造らを捕らえて縛り、理由をただした。国造の稚子直らは、おびえて後宮の寝殿に逃げかくれた。なにも知らない春日皇后は、驚いて倒れ、とてもはずかしい思いをされた。稚子直らは闌入の罪にも坐し、重い罪科に処せられることになった。そこで謹んで皇后のために伊甚屯倉を献上し、闌入の罪を贖うことをこうたので、伊甚屯倉を定めた。今はそれを分かって郡とし、上総国に属せしめている。
（井上光貞監訳［〇二］『日本書紀（上下合本）』中央公論新社より）

この時期、東京湾沿岸から養老川、一宮川、夷隅川を経て房総北部へつながる交通ルートが存在したことが馬具の分布をもとに指摘されており※、台古墳群はこのルートの要衝と考えられる場所に立地しています。このことから、台古墳群の主はこの交通ルートにおける重要人物として王権から信任を得た結果、鏡を手に入れた可能性が考えられます。

※（山田2015,p.238）

いすみ市三門（豆塚）古墳　人物埴輪
左の埴輪の高さ：約63㎝
個人蔵、睦沢町立歴史民俗資料館寄託
夷隅地域では貴重な埴輪の出土例。鏡も出土したとされるが所在不明。

6世紀の古墳から横山1号墳の馬具や台古墳群の鏡のような王権との強いつながりをうかがわせる資料が出土していることは、当地域が王権の勢力下に置かれたという文献の記述と相まって、当時の王権と当地域の豪族との関係を考えるうえできわめて重要な情報を提供してくれています。

国宝『日本書紀』北野本（複製品）千葉県立中央博物館蔵

台古墳群の鏡がうつし出す時代

台古墳群の鏡が生み出され、そして大多喜の地に至るまでの背景には、中国・朝鮮半島、日本列島の大王たち、房総、そして夷隅と、さまざまな地域や規模の有力者たちの思惑や盛衰があったと考えられます。この鏡は、日本列島が東アジアをめぐる国際情勢のなかで揺れ動き、やがて国家へ向かっていく壮大な歴史の一端をうつし出すとともに、房総や夷隅といった地域の歴史を詳細にときあかす鍵となる、きわめて重要な歴史資料のひとつといえます。

しかし、現状では鏡がみつかった古墳の大きさや詳細な年代、出土した遺物の詳細、さらには周辺地域の古墳の様相など、わかっていないことがたくさん残されています。今後さらに調査を進めていくことで、鏡を手にした人物の実像、そして夷隅や房総の古墳時代像が、より明らかになることが期待されます。

謝　辞

この展示の企画・開催にあたり、多くの皆様に御理解御協力を賜りました。ここにお名前を拝し、厚く御礼申し上げます。

【組織】（五十音順、敬称略）
我孫子市教育委員会、市原歴史博物館、香取市教育委員会、木更津市郷土博物館金のすず、君津市久留里城址資料館、宮内庁書陵部、公益財団法人元興寺文化財研究所、公益財団法人千葉県教育振興財団、國學院大學博物館、五島美術館、埼玉県立さきたま史跡の博物館、山武市歴史民俗資料館、志摩市歴史民俗資料館、国立歴史民俗博物館、高崎市観音塚考古資料館、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県産業支援技術研究所材料技術室、千葉県立大多喜高等学校、千葉県立房総のむら、東京都埋蔵文化財センター、成田山霊光館、藤井有鄰館、富津市教育委員会、文化庁資源活用課計画推進係、睦沢町歴史民俗資料館、明治大学博物館、山梨県立考古博物館、早稲田大学會津八一記念博物館

【個人】（五十音順、敬称略）
足達 悠紀、有馬 伸、有村 元春、石山 啓、一之瀬 敬一、上野 祥史、江沢 国男、大島 啓輔、太田 大貴、大前 優子、大宮 一夫、大宮 弘久、鬼澤 昭夫、尾上 周平、垣中 健志、加藤 一郎、金木 佑天、加納 実、木村 結香、忽那 敬三、倉橋 祐真、下山 來夏、白井 久美子、菅澤 由希、髙橋 亘、髙梨 俊夫、高田 貫太、高橋 龍三郎、田中 詢弥、谷川 遼、竹内 理来、辻田 淳一郎、鶴岡 英一、手嶋 秀吾、寺原 進、當眞 嗣史、長佐古 真也、永塚 俊司、野代 幸和、初村 武寛、林部 均、平塚 憲一、深澤 太郎、藤井 善三郎、松浦 誠、三浦 茂三郎、水口 由紀子、水野 敏典、森田 圭一、矢嶋 毅之、山口 文、山田 俊輔、山本 美喜、吉野 健一

引用参考文献

※紙面の都合で各遺跡の報告書は割愛。
石井 友菜・初村 武寛・髙梨 俊夫・鈴木 建人2024「千葉県夷隅郡大多喜町台古墳群の一円墳から出土した画文帯環状乳神獣鏡について」『千葉県立中央博物館研究報告』第17巻1号、pp.77-92
岩本 崇2017「古墳時代中期における鏡の変遷―倭鏡を中心として―」『中期古墳の現状と課題Ⅰ～広域編年と地域編年の齟齬～』、pp.11-22
上野 祥史2013「祇園大塚山古墳の画文帯仏獣鏡―同型鏡と古墳時代中期―」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』六一書房、pp.107-134
上野 祥史2020「Ⅴ 金鈴塚古墳出土鏡と古墳時代後期の鏡」『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』木更津市郷土博物館金のすず、pp.45-58
加藤 一郎2020『古墳時代後期倭鏡考―雄略朝から継体朝の鏡生産―』六一書房
川戸 彰1979「伊甚国造と古墳」『千葉県の歴史』18、pp.65-74
川西 宏幸2004『同型鏡とワカタケル』同成社
栗田 則久2005「伊甚のミヤケ」『月刊考古学ジャーナル』533、pp.11-14
車崎 正彦2003「稲荷山古墳出土の画紋帯環状乳神獣鏡を考える」『ワカタケル大王とその時代』、pp.70-97
小林 行雄1966「倭の五王の時代」『日本書紀研究』2、pp.130-162
斎藤 忠1980「上総大多喜古墳の画文帯環状乳神獣鏡をめぐって」『総南博物館報』第14 号、pp.1-2
下垣 仁志2016『日本列島出土鏡集成』同成社
下垣 仁志2022『鏡の古墳時代』吉川弘文館
白井 久美子2002「110 台古墳群」『千葉県の歴史』資料編 考古2、pp.346-348
滝口 宏1953「上総大多喜の古墳」『古代』第9 号、pp.1-7
玉口 時雄・大川 清1954「上総上瀑村打岡台の古墳」『古代』第13 号、pp. 18-23
千葉県郷土資料刊行会1972『改訂房総叢書』
辻田 淳一郎2018『同型鏡と倭の五王の時代』同成社
辻田 淳一郎2019『鏡の古代史』角川選書
永沼 律朗ほか1985『上総 江子田金環塚古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会
仁藤敦史2022「古代国家形成期の王権と東国」『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』六一書房、pp.251-265
樋口 隆康1960「画文帯神獣鏡と古墳文化」『史林』43-5、pp.673-689
樋口 隆康1981「埼玉稲荷山古墳出土鏡をめぐって」『考古学メモワール』、pp.1-16
水野 敏典2012「三次元計測技術を応用した銅鏡研究」『月刊考古学ジャーナル』635、pp.25-29
山田 俊輔2015「「常総の内海」をめぐる古墳時代中期社会の研究」『考古学論攷Ⅱ』、pp.233-244
渡辺 包夫・實藤 遠1955「上総大多喜町高谷の古墳」『古代』14・15 合併号、pp.70-74

p.2 房総出土鏡マップに掲載した資料の所蔵・画像提供機関
（解説パンフレット内に掲載のあるものは除く）
成田市下方丸塚古墳：成田山霊光館・東京国立博物館蔵、画像提供：Colbase（https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-34682?locale=ja）
市原市姉崎二子塚古墳：國學院大學博物館蔵
木更津市高部30・32号墳：木更津市郷土博物館金のすず蔵、画像提供
木更津市祇園大塚山古墳：宮内庁書陵部蔵、画像提供
木更津市鶴巻塚古墳：五島美術館・東京国立博物館蔵、画像提供：五島美術館<撮影：名鏡勝朗>、Colbase（https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-14344?locale=ja）
山武市島戸境1号墳：山武市歴史民俗資料館蔵